野鳥だより —北海道—

第 3 号
編集者 北海道野鳥愛護会
発行者 北海道国土緑化推進委員会
発行日 昭和45年8月15日
5月・8月・11月・2月 年4回

ウトナイ湖の草原に自然の野鳥を求めて

七月五日、苫小牧市のウトナイ湖畔に、湿原の鳥を求めました。千才空港を過ぎて、なだらかな草原が続きます。かって、タンチョウの里であり、エゾシカの缶詰工場が設けられたり、明治時代までは、野生鳥獣の豊庫で原住民の主要な狩猟地であったところです。

ウトナイ湖畔も、国道沿いは観光地として、すっかり俗化されましたが、ウエナイ側は、千古の湿原がそのまま保存されています。

騒音と排気ガスの都市公害から解放されて、清浄な空氣を胸一杯に吸いこんで、自然というものが人々に与えるやすらぎを感じながら、つぎつぎにあらわれる美しくもかれんな野鳥の姿に、ため息のでるような一日でした。

葺によじのぼって軽業師のようなコヨシキリ、黒い覆面姿で葺原を突走るオオジュリン、これまた異人じみたホオアカなど、草原には草原の自然がつくりあげた造詣物があります。

自然保護という言葉が切実に叫ばれながら、自然保護への手だてに思いあぐんでいるいま、自然とは、野鳥の住める場所ときめこむのも、ひとつのあかしではないでしょうか。

ところが、苫小牧工業開発の無氣味なクレーンの響きが、大量の科学力をふるに動員して、すべての丘も草原も、湿原も湖水も、どんどん工場地帯に変容しつつあります。「沈黙した春」は私たちの身近かにも迫っております——。

鳥　獣　保　護　区

明治34年の狩猟法の改正で、禁猟区という制度が設けられました。読んで字のごとく、狩猟を禁止する場所です。当時は土地所有者の出願によつて定めました

この禁猟区制度は、昭和38年の鳥獣法の改正までありましたが、38年からは鳥獣保護区という名称に一本化されました。

鳥獣保護区には、国が設定する国設と、知事が設定する道設の２種類があり、設定の基準として、２万５千*ha*の森林面積ごとに 300*ha*の保護区を設定することになつています。このほか、タンチョウとか、ハクチョウのような特殊な鳥獣のための特殊鳥獣保護区や、学校林などには野鳥愛護林としての保護区、都市近郊では野鳥誇致のための保護区などに分類されます。もちろん野生鳥獣の保護繁殖が目的ですから、設定期間は10年以上20年以内となつています。

現在、道内には230カ所の保護区があり、面積は20万*ha*を越えており、さらに本年５カ所が新設されることになつています。鳥獣保護区の中では、野生鳥獣を捕獲するような行為は一切禁止されています。

狩　猟　鳥　獣

日本で見られる野鳥の数は 440種といわれますが、このうち狩猟鳥となつているものは25種（カモ類を一種とみる）です。一般に保護鳥という言葉が使われていますが、上記の狩猟鳥以外のものは、すべて保護鳥ということになりますから一切捕獲はできません。狩猟鳥は農林大臣が定めることになつていますが、繁殖力が強く、害性の多い、狩猟価値のあるものが狩猟鳥となつているようです。

狩猟鳥は、狩猟期間（10月１日から翌年２月15日まで）にはハンターに狩猟対象物として解放されますがこの期間以外は保護鳥と同じ扱いを受けます。また、狩猟獣は17種ですが、どちらかといえば獣類は害性が多く、ほとんどが狩猟獣となつています。また激減を防止するため、メスジカなどは狩猟獣からはずされています。

現在、狩猟鳥に定められている主なものは、次のとおりです。キジ、コウライキジ、ヤマドリ、ウズラ、エゾライチョウ、カモ類（オシドリを除く）、アイサ類、ヒシクイ、マガン、バン、オオバン、タシギ、ジシギ、ヤマシギ、キジバト、カラス、スズメ等です。

鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律

わが国で狩猟のための規制ができたのは明治６年の「鳥獣猟規則」がはじまりです。これが明治28年に「狩猟法」となり、さらに大正７年に大巾な改正がなされました。ですから、古いハンターの人たちは現在でも狩猟法とよんでいるようです。

この狩猟法が、昭和38年にさらに大巾な改正が行なわれ。「鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律」として再出発することになりました。改正の趣旨は、旧法では狩猟を規制して、鳥獣の捕獲に各種の制限を設けることにより、反射的な鳥獣の保護をねらいとしていたものですが、新らしい鳥獣法では、鳥獣の保護増殖を積極的に進めるため、国や都道府県の政策として、鳥獣保護事業計画を立て、これを行政面で実施することにしています。

開発が進み、文明が進歩するにつれ、自然の破壊もそれに比例して進みます。しかし、自然はこの地球上の貴重な遺産であり、人類の発展のために、後世に伝うべき責務を負わされているといえましよう。もちろん鳥獣はその自然の大切な一部分とし、積極的な保護対策を講ずることがこの法律の目的となつています。

鳥　獣　審　議　会

鳥獣保護事業についての農林大臣の諮問機関として中央鳥獣審議会、また知事の諮問機関として、北海道鳥獣審議会があります。

北海道鳥獣審議会は、昭和38年12月に設けられましたが、委員は15名で、知事が委員を委嘱することになつております。構成は、鳥獣保護関係者２名、狩猟関係２名、林業関係１名、農業関係１名、大学関係１名市町村関係１名、観光関係１名、その他行政機関関係者６名となつています。

審議会は知事が計画する鳥獣保護事業計画や、鳥獣保護区の設定、狩猟の制限等について、知事の諮問に応ずるほか、鳥獣保護の重要な事項について、意見を具申することができることになつています。

審議会は、６月と２月の年２回程度開催が通例となつており、委員の任期は２年間です。現在の委員は本年２月に委嘱されており、会長に犬飼哲夫（野鳥愛護会々長）会長代理に宮脇恒（野鳥愛護会副会長）両氏が入つているほか、鳥獣保護関係者として土屋文男（野鳥愛護会副会長）中川敏（円山動物園長）両氏が委嘱されています。

野幌のアオサギ発見記

農学博士　井　上　元　則

1. はじめに

石狩平野の中に浮島のようにこんもりと見える美林はかって野幌原始林といわれたものだが、現存する2,040*ha*は、開道百年を記念して、昭和43年5月15日に道立自然公園に指定された。この公園は札幌市、江別市、広島町にまたがり、道民の森として誕生したもので、自然の影観をそこなうことなく、道民の保健、休養、教化の場として保全されることになった。

また昭和44年10月に同公園は、鳥獣保護区の設定を受けたが、その際、江別市と広島町の境にあるアオサギの営巣地約62*ha*が、特別保護区に指定された。

私は20数年間、北海道林業試験場に在勤し、現在も引き続いて野幌に居住している関係で、昭和17年5月21日アオサギの集団を発見すると同時に、最初の調査を行なって、それ以来、今日まで観察を続けてきた。従って、これらの資料の散逸しないうちにその概要を記しておきたいと思う。

2. アオサギの発見

昭和9年4月、私は野幌林産試験場に赴任して、もっぱら森林保護の立場から、鳥獣、昆虫などの生態を研究していた。たまたま昭和10年5月、瑞穂地の周辺で野鳥の生態観察をしているとき、1～2羽のアオサギが大木の上に休んでいる姿を見た。

その後野幌国有林の鳥獣調査を毎年続けてきたが、ときどき林の上空を飛ぶアオサギを見る事があった程度で昭和16年頃までは巣を発見できなかったが、たまたま昭和17年5月20日、広島森林担当区員先名主事から、林業試験場へアオサギの集団が、東7号線附近に現れたという報せがあった。当時の服部場長といっしょに翌21日現地を視察し、更に同月25日に営巣状態を詳細調査した。

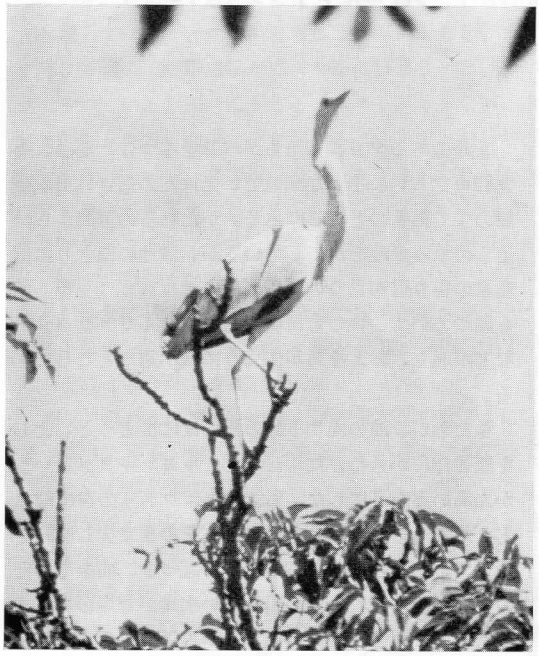
当時の記録から抜すいすると、アオサギの巣は東7号線の南側で、野幌事業区36林班と37林班の境界附近にあったが、特に37林班の方に多かった。しかも林縁の農耕地に近い平担地で、小川が流れており、アオサギは老大木の高い枝に構巣していた。主要林木はトドマツ、アカダモ、オヒヨウ、ヤチダモ、セン、シナ、ナラなどで、うっ蒼と茂り、樹高は18～25米、直径40～110糎、蓄積は1*ha*当り300立方米内外で、樹令100～200年に達する林地であった。林内にはところどころ笹が生育し、雑草としては湿地に良く生えているバイケイソウ、ミズバショウ、エンレイソウ、オシダなどがあった。

この鳥が巣をつくっていた木は、ヤチダモ17本、アカダモ13本、シナ7本、セン4本、ナラ2本、オヒヨウ1本、トドマツ1本、計45本で、巣の総数は99個見つかったが、とくにヤチダモとアカダモを利用しているものが多かった。したがって1樹に1～8個の巣があり、卵は平均22個だった。針葉樹上に営巣していたのはただ1例で、他は全部広葉樹を利用していた。

3. 推定数は800羽

当時広島街道に住んでいた地元の佐々木市太郎、山田伊太郎氏らの話では、この鳥は昭和15年ごろ突如として群生しはじめ、昭和16年は前年の倍ぐらい、昭和17年はまた前年の倍ぐらいにふえたという。

昭和19年ごろはその数は、かなり多くなって、300羽



（150つがい）ぐらいと推定された。

終戦後の昭和21年3月には早くも入植者が来た事は、光原部落に住む西川半次郎氏の証言で明らかである。そこでアオサギは営巣場所を500米ほど移動しはじめ、最終的には現在のサギの森（森林保全区）に移動したものである。

最近ここがアオサギの生息地として有名となり、繁殖期には入林者がはげしく往来するためか、アオサギは次第に林縁から西方の奥地に移動しはじめ、とくに42年ごろから西川氏の裏山の方に数組が移動しはじめている。

本年5月25日、筆者は能登担当区員、西川半次郎氏ら

と調査をしたが、構巣数はおよそ240個と算定している。この鳥は毎年4月中旬に渡来すると、古い巣を修理して営巣するもの、古い巣を捨てて新しい巣をつくるものなどあって、巣の数だけ営巣利用していることはない。また大風が吹くと古い巣や粗雑な巣は吹き飛ばされて落下するものもあるから、巣の数は必ずしも一夏中一定しているものではない。

以上の資料から推定すると、現在繁殖している親鳥は多くとも400羽（200つがい）をこえないであろう。しかもこの鳥の平均産卵数は4個であるから、仮に全部ふ化して育ったとしても、親鳥と幼鳥を合せ秋に 1,200羽はこえない勘定になる。

しかしここでは繁殖中いろいろな事故の為死亡し、産卵数の半分が亜成鳥となれば良い方であろう。実際秋には巣立した亜成鳥と親鳥を合せて 800羽くらいがほぼ実数に近いものと推定される。

4. おわりに

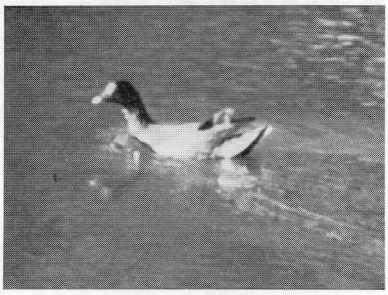
この鳥はエビ、カニ、魚類、カエル、タニシなどを食するので有害ではあるが、ネズミや昆虫などを食する点では有益である。またこの鳥が大集団をなして繁殖する場合は、糞で樹木を枯らすこともあるというが、野幌森林公園ではまだそのような大害は認められない。

むしろこの鳥の優美で壮大な姿が、原始林風景に多大の野趣を添え、森の愛好者を楽しませてくれる恩恵の方がはるかに大きい。

また野幌原始林にこのようなアオサギの大集団が営巣しているのは、周辺の湿源、大小の河川、沼、水田などに餌が沢山あるからである。しかし最近、湿源の増田が著しく進み、アオサギの餌場がしだいに失われつつある現状を思うとき、附近に餌場をつくり、積極的な保護に力を入れるなど、原始林のアオサギ繁殖をいつまでも守りつづけたいものだ。　（札幌栄養短大教授）

光珠内のバン

美唄市　野　村　紀　雄



6月のある夕方、私たちがバンをみつけた池は、周囲80mぐらいの小さな溜池で、光珠内の道立林業試験場のすぐ裏手のところにある。かたわらの道路からはよしの繁みが池をかくしているが、溜池のほとりには農家の通り道があり、近くの農家ではスピッツを3頭も飼つていて、いつも田植えの苗を積んだトラクターなどが通り、およそ鳥が住まうには不適なところである。

私たちが、池の向こう側の田んぼに出ようと、よしを無雑作にかきわけた時だつた。キョッキョッというかん高い声を耳にした。ちよつとニワトリの声に似たどこかこっけいなひびきがある。そのまま少し時間を置いて、しげみの中をしのび足で近づき、池をそっとのぞいてみると、一羽の黒っぽい水鳥が対岸のあさせを首を前後させて歩いているのがみえる。全身黒っぽく、目の下からくちばしにかけてだいだい色のあざやかなバンだ。

バンはしばらくして見えなくなつたが、その姿をかくしたしげみのあたりに近づくと、こんどはいつの間にやら反対側の岸に姿を現わして、キョッキョッとするどい鳴き声を発している。警戒音だ。その警戒音が営巣のあかしであつて、さてはと、さきほど姿をかくしたしげみの中に目をこらすと、案にたがわず、すぐ近くのフトイの根もとに木の葉をまるめこんだ巣を発見することができた。その中に、一羽のメスらしいバンが身をしずめている身体の下には、子供をだいているらしい。相変わらず、オスは遠くで警戒音を発している。

翌朝早く、この巣の近くで、親鳥のあとを追う真黒な子供達をフィルムにおさめることができた。その数チョコチョコ11羽。こんな身近なところで、バンの営巣を発見したことは、野鳥に親しむ私たちにとつてまことに楽しいことである。

（光珠内・道立林業試験場技師）

バン　ツル目クイナ科バン属。夏鳥として春から秋にかけて渡来し、湖沼、河川、沼沢など概して平地の水辺に多い。両脚を交互にし、かがとを高くあげて静かに歩く。浮草の葉の上などを軽々と渡り、地上を歩くときは、頭部を前後に動かし、尾を立て尾部をときおり上下に振り動かしている。

額には鮮紅色の額板があり、ばんどり、たどり、ばんくろ、ばんくいなの俗名がある。狩猟鳥となつているが、全国的に減つており、本道でも年間数十羽が捕獲されているにすぎない。

同科に属するオオバンは、バンよりも一回り大きく額板が白い。オオバンも狩猟鳥で、バンよりもさらに数が少ない。

身辺野鳥雑記

江別市　竹　越　俊　文

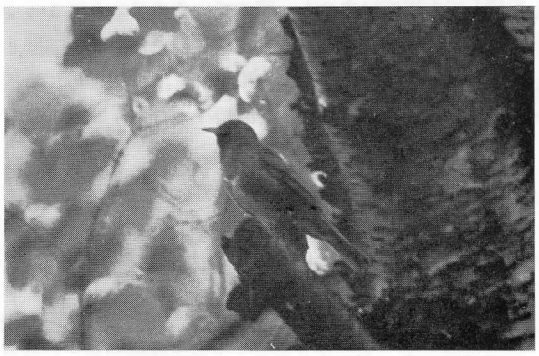
筆者が生まれた前後、家の中は鳥かごと箱でいつぱいだつたという。それというのも、中学で数学教師をしていた父が好きで野鳥を飼つていたからである。カワセミなんかには、小フナやドジョウをすくつてきて、タライにストックしておいて食べさせたものだ。

いまならば鳥獣保護法違反で罰せられるが、その頃は取締りもほとんどなく、裏のやぶへカスミ網を張つておけば、いくらでもとれたのだから、野鳥もたくさんいたらしい。

父が新入りのミミズクを見せようと、筆者を抱いて二階へ上つたことがある。やつと這いずり回る頃だつた。父はすつかり鳥に氣をとられて、筆者を畳の上へ放り出しておいたため、這いだした筆者が、その間にはしご段をゴロゴロと落下し、運よくけがはしなかつたものの、それほど父の鳥好きは有名であつた。

大変だつたのは母である。ひごろ鳥の世話をやかされその上、父はカスミ網をかけに行くのも着流しのままであつたから、やぶの中では、着物のカギザキは毎度のこと、業をにやした母が、勘忍袋の緒を切つて、かごの鳥を片端から解放したというエピソードもある。

筆者に、探鳥と野鳥観察の手ほどきをして下さつたのは、甲州の小鳥の小父さんで知られた中村幸雄さんである。中村さんのお供をして、北海道内各地を前後三回ばかり廻つた。生まれつき音痴なもので、声のリズムが簡



単におぼえられず、何度もテストされ、何度も落第してやつと聞きわけられるようになつた。

現在、山階鳥類研究所におられる松山資郎さんには、戦後すぐであつたが、食性調査のことなど、教示を受けた。その後、仕事の上で直接御指導いただける立場になり、7年ばかりお世話になつた。日本野鳥の会会長の中西悟堂先生にも御紹介いただいたり、ますます野鳥にひかれたわけである。

筆者は数年前、井上元則さんのお世話で野幌の町はずれに小さいながら宅地を求めた。そして一年がかりで、そこへ家を建てたのが昨年である。あたりに家はまばらで、すぐ裏は牧草畑、その向こうに鉄道防雪林がある。むかしあつたようなドイツトウヒの立派なものではなくカラマツの若い林で、ニセアカシアなどがしのびこんでいる。

井上さんには、終戦直後刊行された、野幌原始林とその周辺の野鳥を調査された好著があり、筆者もかねて読ませていただいていた。しかし、新居のあたりは野原にかこまれたような環境で、ろくな鳥は来ないだろうと思つていた。もしかすると、スズメでさえあやしいものだとも考えていた。ところがどうして、春になると、まずオオジシギの急降下爆撃がにぎやかにはじまつた。夜中までやつている。六月に入ると、エゾセンニユウが、これまた夕方から一晩中、夜が明けるころまで、おしやべりをつづけている。北海道のホトトギスと言われ、テツペンカケタカときなしをするが、ウグイス科の鳥で、ケヨツケヨツ、ホケキヨーときこえる。その鳴き方の忙しいこと、息つくひまがあるのかと思うくらい。

あかつきに目覚めると、牧草地で鋭くケンケンとコウライキジの声がする。昼はよく姿を見るが、声もすてがたくそつとカーテンをあけてみる。

カツコウもよくなきかわす。アオジが低い枝の上にとまつてさえずる。庭へモズの夫婦が、何度かやつてきて同じところにとまつて行く。

ほほえましいのは、スズメ一家である。イヌのおあまりをねらつて、ポーチへ来るのである。一番子が巣立つたばかりと見えて、大きさは親とかわらないが、くちばしの黄色いのが四羽ばかりいる。やせた親が飯粒をくわえては、子スズメに大口をあかせ、中へ押し込んでやつている。イヌは鼻先にいてしらん顔をしているが、隣近所から集まるスズメには、急にほえ立てて追いはらつてしまう。わが家の常連にはおとなしいが、はたしてわが家のスズメのみわけがつくのかどうかはあやしい。

毎日の野鳥のおとずれに、こんどはどんなお客だろうと楽しみな日々である。

（写真は北大植物園のアカハラ・萩千夏さん撮影）

ヒヨドリとエゾヒヨドリ

―― 種と亜種のこと（1）――

百　武　　充

北海道の鳥について書かれたものを読んでいると、エゾヒヨドリとか、エゾアカゲラとか、名前のはじめにエゾのつく鳥がたくさん出てきます。でも、野外でみるヒヨドリやアカゲラは、北海道のも本州のも同じ姿をしていて区別がつきません。それなのに、なぜ違う名前がついているのでしようか。

ヒヨドリに例をとつて考えてみましよう。日本のヒヨドリは、北海道・本州・四国・九州のほか、伊豆七島・奄美大島・琉球などに住んでいます。でも、それらの各地方のヒヨドリをくわしく調べてみると、地方によつて体の大きさや色が少しずつ違つています。これは、たとえば北海道のヒヨドリと九州のヒヨドリの間にあまり交流がないために、離れた地方の鳥が、それぞれ系統的に固定される傾向があるからです。人間だつて、お互いにあまり交流のない日本人とアメリカ人とは、同じ人間でも顔つきや肌の色がはつきり違いますね。鳥についても同じようなことがいえるのです。一般に、同じ種類の鳥でも、北の地方に住むものは身体が大きくなり、嘴や脚などの、羽毛におおわれていない部分は小さくなる傾向があります。（これは、寒い地方では、熱の発散をなるべく少なくする方が、生きてゆくのに有利だからなので身体が大きいのも、体積にくらべて表面積の割合が小さくなるからです。）また、色も北のものほど白っぽくなります。

このように、地方によつて系統的に固定される傾向があつても、北海道のヒヨドリと九州のヒヨドリは、やはりひとつの種類なのです。もし北海道のヒヨドリが九州のヒヨドリとつがいをつくつたら、それはちやんと健康なヒナをつくることができます。ちようど、日本人とアメリカ人が、みかけが違つていても「種」としてはひとつであり、結婚して子供をつくるのに、なんの支障もないのと同じようなものです。

このような、同じ種のなかでの地方的な差がある程度はつきりしているとき、この差をはつきりあらわすために「種」の下に、「亜種」という分類の単位をつくることになつています。

ヒヨドリという種の場合、北海道にいるのをエゾヒヨドリ、本州・四国・九州にいるのをヒヨドリ（種名と同じでまぎらわしいのですが、亜種名としてのヒヨドリです）、その他地方によつてアマミヒヨドリ、リユウキユウヒヨドリなどの亜種に分けられています。

でも、これらの亜種どうしの違いは、たくさんのヒヨドリを調べたとき、それらの平均値に統計的な差があるという程度のものですから、野外観察で亜種まで見分けられるものではありませんし、見分ける必要もないのです。分類の一番基本になるのは「種」なのですから、種名でヒヨドリと呼べば充分なのです。

亜種までいつて、くわしく呼ぼうとすると、かえつていけない場合もあります。カワラヒワがそうです。これは北海道の亜種をカラフトカワラヒワ、本州の亜種をコカワラヒワといいます。カラフトカワラヒワの中には、冬は本州に渡つてコカワラヒワと同じところで生活するものがあります。また、千島からは、カワラヒワのもうひとつの亜種であるオオカワラヒワが日本にきて、冬になると前の二つの亜種とともに見られます。これらを野外で見分けることはできません。ですから、亜種名でカラフトカワラヒワなどと呼ぶよりも、種名でカワラヒワと呼ぶほうがずつと良いのです。

いま日本で出版されている一般向けの鳥類図鑑は、殆んど亜種が基準になつているので、カワラヒワという種を探しても出ていません。載つているのはコカワラヒワという亜種だけです。でも、さつき書いたように亜種よりは種の方がずつと大事な分類の単位であり、われわれアマチユアには亜種はあまり必要ないことなので、なるべく種名で呼ぶ習慣をつけるのがよいと思います。

ここで、氣をつけねばならないことがあります。

本州のエナガと北海道のシマエナガ、本州のカケスと北海道のミヤマカケスは、色彩がはつきり違つていてすぐに区別できますが、共にエナガ、カケスという種の中での亜種の違いにしかすぎません。これはなぜか、ということがひとつ。もうひとつは、ライチヨウとエゾライチヨウが別の種であるように、なんでもエゾのつくのがつかないものの別亜種ではない、これを見分けるにはどうするのか、ということです。この次にはこの二つについて書くことにします。

（本会幹事）

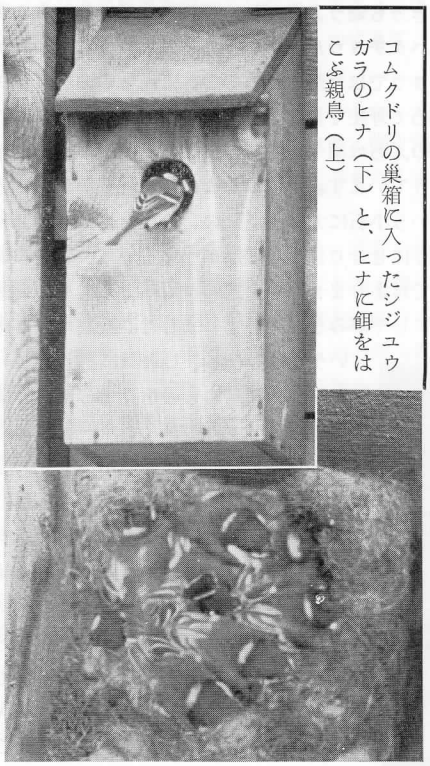
わが家のシジユウカラ

土屋文男

庭に来る小鳥たちのために、巣箱をかけてやつてから十年近くたつた。はじめは、いわゆる手引き書どおりにシジユウカラ用、コムクドリ用を造つた。数年して、スズメの習性に合つた専用のもの七箇をかけた。なんといつても利用するのはスズメたち、ある年はあまりさわがしくて、朝などぐつすり寝ていられないので、一回目の巣立ちの後、スズメ用の箱を取り去つた。

前穴のごく小さなシジユウカラ用も、けつこうスズメが入る。いちどには入れないので片方の肩を落して、するりと入る。しかし、シジユウカラも幾度となくヒナを育てた。前年の子が翌年、同じ巣箱を利用したことがあつた。脚に飼い鳥用のリング（足輪）をつけておくとわかるのである。はじめの頃はセルロイド製のものをつけたが、親が取り去るのか巣立つてからの自然が峻烈なのか、いつとはなく、なくなつてしまう。

コムクドリ用は一箇、巣箱の作り方をたずねにくる人へのデモストレーション用である。玄関近くの石炭小屋にとりつけておいたが、誰の目にもつく。比較的人の出入りの多い所にあるこの巣箱が、シジユウカラには、いちばん氣に入つて、何度かヒナを育てた。



コムクドリの巣箱に入ったシジユウガラのヒナ（下）と、ヒナに餌をはこぶ親鳥（上）

写真のように鳥体にくらべて、ずつと大きい前の穴の直径で、なにごとも教科書どおりにはいかぬもの。

ことしのヒナは八羽、六月中旬、元気に巣立つ。庭にブラインドをはるのも物々しいしカメラをかまえて写す。入るときはカメラが気になつて一度ふり返つてから入り、出るときはヒナのフンをくわえて雷光石火、パツと飛び出すのである。

来客が巣箱の前に立ちどまつているときなど、早く帰つてくれといわぬばかりに、電線に止まつて、ピピピー・ピピピーと鳴く様子もいじらしかつた。巣材はわが家のスピイツの毛が主体。中心には落葉松の若葉が少々敷いてあつた。

（札幌市南29・西12　医師）

巣箱は樹幹に放置しないこと

八雲町　北口　盛

昭和26年に創立された私たちのクラブは、探鳥会や野鳥教室等、各種の野鳥保護思想普及のための行事とともに、毎年巣箱かけを行なつていますが、春に取りつけた巣箱は、秋の観楓会やキノコ狩りなどに、その利用状況を調べたり、掃除をして翌春の営巣にそなえることにしています。

ところが、古い巣箱ばかりでなく、毎年春には大量の巣箱を新親に追加してゆきますので、数の中にはそのまま放置されて、いつか巣箱は破損し、架設に使用した針金だけが残つてしまいます。ところが、針金は木の成長により樹幹に食い込んで、外面からは見えなくなつてしまい、伐採のあとで製材にして、ノコをいためたり、木材価値を失なつたりして気がつき恐縮した次第です。

このため私たちは、おそまきながら巣箱の架設にはビニールひもを使用することにしています。やむなく針金を使用するときは、なるべく枝条を利用し、2年に一度はかならず付けかえることにしました。また、これからは、メモ程度でも配置図と、巣箱の番号にも注意して、秋の利用調査もれを防ぐ方法も考えています。巣箱のかけつ放しは、むしろ山林の育成に支障となり、ぶざまな姿をさらしてしまい、野鳥保護の精神に悪影響を与えます。

（八雲町愛鳥クラブ会長）

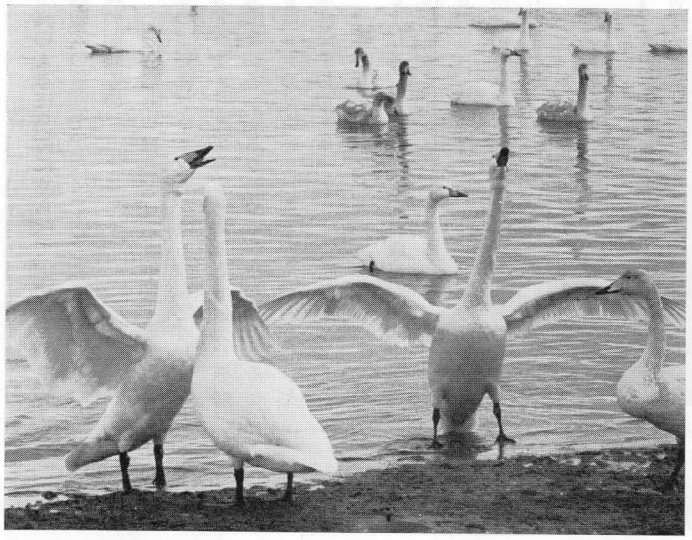
シラルトロ湖の白鳥

札幌市真駒内　衛藤　たみ子

二、三年前のお正月のこと、娘が東京から帰省して、北海道の冬のタンチョウが見たいという急な話で、行きあたりばったりの、親子三人、プランも立てずやみくもに元日の夜行列車で、釧路からのりかえて茅沼に行きました。小さな旅行案内のパンフレットを、鉛筆の先で指さしながらの、全く無鉄砲な旅です。

改札口を出ると、シラルトロ湖への略図が出ていて、「どっちへ行こうかな」と見ていると、働きに行く母親と青年が通りかかり、地図を指さして、そこへ行くといいよ、と教えてくれました。

マイナス18度ぐらい。晴天。空気中の水分はすべて凍るような冷たさです。電線に結氷して真白な太い線が青空に伸びていました。防寒首を着け眼だけを出して、ぴりぴりする痛いような空気を「北海道らしいネ」と喜びながら、雪道を線路に沿って歩きました。農家が一軒あって白い犬がほえてむかえてくれましたが、その傍の道を下ると、凍った湖畔に出ました。夏はキャンプ場らしくいろいろの設備がしてあって、細い流水だけが、雪を割って湖に注いでいました。陽が出たばかりで、湖一面が凍つていて、タンチョウはおろか雀一羽見えません。でも良く見ると遠く湖面が円く白くもり上つていて「あれは、ハクチョウではないか」と、主人が言いました。「そんなことないわ、雪の固りよ」などと言っているとき、突然、コウーコウーと、三羽の大きな鳥がゆうゆうと頭上を飛んで行きます。太陽のまぶしい白さを写して年賀状の絵にしたいような姿でした。



息をのんで対岸の丘に見送りましたが、あとから思えば、唐路湖の方へ飛んで行つたようです。タンチョウが見たい、タンチョウの飛来地と思うものですから、タンチョウだ！と喜んだのですが、黒い部分も見えなかつたし、鳴き方も違うようだし、少し太つているから、残念ながらハクチョウだ、ということになりました。しかしタンチョウではなかつたものの、ほんもののハクチョウをはじめて野生で見る喜びに胸がふるえました。

湖岸のふちは凍つていて、少しばかり水の流れのある所がとけています。とけかかつた傍に腰をかがめると、小石という小石に大雨覆羽位の、霜桂と言おうか、矢羽根のようにせせり立つた結晶がついていて、朝陽に輝いているではありませんか。宝石を見るよりもその天然の美しさにしやがみこんでしまいました。静寂な大自然というものをひしひしと身に感じます。ふと崖ぎわに動くものを見ました。赤栗色をしたミヤマカケス、ブルーと白と黒が目立ちます。二羽、蔓のかかつている灌木の枝から枝に飛び移つていました。

午後からは雪の唐路湖を廻つてシラルトロ湖の対岸に出ました。「ひるまは、ハンターやスケーターで、ハクチョウが湖の真中にいるんです」と、湖畔のドライブウエイに車を止めて運転手が教えてくれました。ハクチョウの群が、七八羽づつ二かたまりになつてうづくまつていました。一羽が首を長く伸ばしてギヤオーギヤオーと鳴きました。三四羽首をのばして立ち上りましたが、また静かに雪のかたまりのようにうづくまりました。

向こう岸から見た雪の固りは、やつぱりハクチョウだつたのでした。案内してくださつた方が、「ハンターやスケーターが帰ると、湖のふちのアマモを食べに、夕方には岸近く来ます」との事でした。かえりの車が除行すると、道の雪の上にたくさんの獣の足跡が見えました。野兎だそうです。「野兎の被害が大きくて、林野庁で一羽五十円で買い上げた事もあるんですが、とてもとても退治できなくて困つてるんです」とも言つてました。何か溜息の出るような話ばかりです。

タンチョウを見る計画が思いがけないハクチョウになつてしまいましたが、それでも野鳥を見ようとする気持の中には、大自然にふれたいという切なる心情があり、冬の釧路はその意味では満足を与えてくれました。

（写真は根室市近藤映二氏撮影・オダイトウ）

野幌原始林探鳥の記

札幌市　中川昭子

5月10日午前6時30分、愛鳥週間の幕あけとともに野幌原始林へ野鳥バスが走りました。

春たけなわとはいえ、新緑のこずえが大きくゆれて肌寒さを感じる中を、親子づれのほほえましい姿も多く、車内の空気がほのぼのとなごみ、みんな未知の世界にあこがれるように、目を輝かせています。

あざやかなグリーンの牧草地には、牛がゆつたりと草をはむ姿が目にうつります。また、耕うん機のひびきや田植えの準備に余念のない農家の、活気あふれる光景にもふれることができました。

林業試験場の前でバスをおり、試験林の美しい樹海の奥深く原始林にたどりつきますと、原始の姿をそのままに、うつそうとした樹林の中に、美しい小鳥たちのさえずりが、喧噪の巷から私達を解放してくれます。

あいにくの霧雨で遠目はききませんでしたが、やちぶきの目にしみるような黄色い花や、淡い紫色のかれんな野すみれの花、そして、まっ白いこぶしの花が、もえるような若葉の中に、絵のようにあざやかに咲きほこり、愛くるしいシマリスが枝から枝へと機敏に走りまわつています。ウグイスが自慢ののどをきそい、オオルリやムクドリ、キビタキなど、目にすることのできる野鳥だけでも31種類、それら野鳥がさまざまなソプラノを聞かせます。アカゲラは全く驚く程の早業でリズミカルにドラミングをします。ちよつとのぞいてみると、大きな木の幹にまんまるい穴を精密すぎるほどきれいにほりこんでいました。

ワラや枯木をよせ集めた大小の巣や、人工の巣箱がいたるところにかけられ、そのまわりを親鳥たちがせつせと巣造りをしているのでしようか、いそがしく飛び回つています。やどり木がちやっかり木の枝に根をおろし、あたかも愛の家族が巣を作つているかのようにも見えます。

アオサギの森では、ちようど産卵期にあたつており、巣をおびやかすことを避けて、200m程 手前から双眼鏡で観察しました。樹林の上を大きなアオサギが無数に羽ばたいており、その壮大な姿に魅せられました。

ふだん騒音の中で生活し、めつたに小鳥のさえずりなど耳にすることのできない私にとつて、大自然の中で、思いつきりはばたく野鳥の姿を見ながら、さわやかな朝をすごしえたことは、とても新鮮なものとして心にやきつきました。野鳥の名前と姿とはなかなか一致しそうにもありませんが、機会があればいつでも参加してみたいと思います。　（道庁林政課）

私たちの探鳥会

美唄市　藤巻裕蔵

庭にスイセンやチユーリツプが顔を出すころになると家のまわりではシジユウカラやヤマゲラがいつか姿を消し、かわつてアオジやカワラヒワがさかんにさえずるようになる。

こんな鳥の声が合図で、「そろそろ探鳥会でもやろうか」と、私たちの鳥の会は動きはじめる。

「鳥の会」は、昨年の6月に誕生した。仲間は5人、それにプラス・アルフア。その後3回ほど探鳥会を行つたが、秋から冬にかけては冬眠状態だつた。しかし、その間にも今シーズンにそなえて、ある人はレコードで鳥の声を耳にたたきこみ、ある人は双眼鏡を買い入れ、着々と準備をすすめていた。双眼鏡の購入では、3人もまとまつたので、カメラ屋では割引きサービスというおまけまでついた。

5月17日午前7時、さて当日は朝から快晴。双眼鏡をさげ、図鑑を片手に林業試験場を出発、畑の中を裏の林へと向かう。

「今とんでいつたのはアオジ」

「遠くでアカハラが鳴いている」

今回は鳥の名前も、私が言うまえにみんなの口から軽くとび出す。

林の中に入ると、そこはさながら小鳥達の演奏会場。ツツドリ、ウグイス、アオジ、アカハラの声がとぎれることなく交さくする。「クイー、クイ、クイ…」と、ときどき他の鳥の歌をかき消すような大声でアリスイが鳴き出す。しばらく歩くのをやめてじつとしていると、すぐそばの笹やぶの中からヤブサメが虫のようなかすかな声をあげている。前方からはセンダイムシクイ、左手ではクロツグミ、全く鳥の声に不自由はない。新しい鳥が現われるたびにノートに記号がふえてゆく。畑の中とちがつて、林の中に入るとノートの名前のふえ方は急にはやくなり、たちまち20種近くになる。

林の入り口近くに溜池があるが、ここではさらにカルガモとオオヨシキリを追加することができた。

9時ころになると、夜明けからさえずつている鳥たちがひと休みするので、鳴き声はあまり聞こえてこなくなる。この日はこのへんで解散することにする。

ノートに記録された鳥の名前をあげると、アオジ、カワラヒワ、ウグイス、シメ、ツツドリ、アリスイ、ホオジロ、アカゲラ、アカハラ、ヒヨドリ、センダイムシクイ、コゲラ、ヤブサメ、キビタキ、オオルリ、ハシブトガラ、イカルなど24種だつた。

（光珠内・林業試験場）

野鳥愛護の輪を広げよう

札幌市　柳　沢　信　雄

本年2月、北海道野鳥愛護会設立の準備が進められていることを知り、私もその一員として参加したのですが私は以前から野鳥にばくぜんとした興味をもつていました。しかし、その興味を行動に移すためには、やはり身近かに指導をしていただく人がほしく、指導機関のできることを心から待ちのぞんでいたのです。

年々野鳥の姿がみられなくなる中で、数少なくなつたとはいえ、身近かに野鳥を観察しながら野鳥への認識を深め、野鳥保護のために立ちあがろうとする多くの方々があつたことを知り、心強く感じます。

土曜日の午後など、一週間の仕事から解放されたひとときを、街の騒音から解放されて、静かな郊外にさそつてあげること、それだけの計画でも喜んで参加くださる仲間が数多くいるものです。

草原に腰をおろし、空の青さを目にし、澄み渡る空気を胸にすうとき、誰もが参加したことを喜び、計画に感謝してくれます。そんな場所で美しくかれんな小鳥の姿をみつけ、自然の創造の微妙なしくみを知つた時、喜びはさらに倍加するのではないでしようか。私自身、まだ充分な知識がないため、参加者を満足させる説明ができず残念ですが、今のところそのことが探鳥会へのさそいとなり入会のすすめともなつています。

身近かな仲間を気軽に自然にさそうこと、このようなことが、あらためて自然の良さに気づき、自然を大切にしなければならないことを強く感じさせることにもなると思います。

私達会員の一人々々が身近かな地域や職場で、仲間の輪を少しずつ広げていくとき、いくつもの輪が大きくひろがり、重なりあつて北海道全体に野鳥愛護の気風がはぐくまれるのではないでしようか。

（豊平小学校教諭）

北海道の鳥

コウライキジ

本道のコウライキジは、昭和5年に大陸産の種鳥を農林省鳥獣実験所が、本道に移入して放鳥したものが、繁殖してきました。コウライキジはキジの亜種ですが、首に白いリングがあり、日本キジよりも大型で美しいといわれます。

キジ類は、日本ばかりでなく、全世界でも主要な狩猟鳥であり、狩猟のための鳥ともいえます。このため人工養殖がどんどん進んでおり、本道でも毎年1千羽近いものを養殖放鳥しています。

コウライキジは、主として豆類、雑穀等を主食にしており、このため繁殖いたしますと、どうしても農作物に被害が出て参ります。したがつて、ある程度繁殖したところでは、狩猟のために解禁が必要となります。

本道では、昭和43年にはじめて日高地方で解禁し、11月1日から10日間狩猟をすることができました。また翌44年には、日高、渡島、胆振の3支庁管内で解禁となり、1万羽ぐらいが狩猟されました。本年はさらに石狩管内、空知管内の一部が追加されます。

札幌周辺でもずいぶん繁殖し、本年は解禁となりますので、これは野鳥保護の上でゆゆしい問題であると述べる人も多いようです。たしかに、野鳥保護をとなえるかたわらで、残酷な殺傷が行なわれるわけですが、狩猟というものも、国民の伝統的な行為として法律のうえで認めているわけです。

しかし、狩猟にはきびしい資格と、獲つてもよい鳥獣と、期間と、狩猟の方法が規制されております。これらの規制のもとにのみ狩猟が許されているのも、鳥獣保護という前段があるからです。

しかし近年は、狩猟を一般の山野で許さずに、特定の地域（これを猟区といいます）でのみ許すべきだという論義が高まつております。こうなりますと、人工養殖のしやすいコウライキジは、さらに狩猟対象物として大切になつてくるでしよう。どちらにしても、撃たれるために生まれてきた宿命の鳥ともいえます。

（小樽市郊外のマミジロのさえずり——小樽市会員　渡辺俊夫氏）

原生花園にアマサギ

網走市　大西重利

6月3日、鳥獣生息調査をしているとき、原生花園の中に珍らしい鳥を発見し、近づいてみるとアマサギ（シヨウジヨウサギともいう）でした。

トウフツ湖にオオハクチヨウが一羽残つているので、その見回りをかね、原生花園の高台から、双眼鏡で探しあて、なぎさから1.5粁ぐらいのところから、しのび足で近づき、やつと50米ぐらいのところで写真におさめましたが、白鳥には逃げられました。

そのとき、なぎさぞいに、100米ばかり離れた湿原に放牧中の牛馬のそばに、白サギらしい姿を見つけ、双眼鏡でよくたしかめますと、首から頭にかけ鮮やかなだいだい色、体は純白のサギであることから、アマサギと確認いたしました。さつそく50米ぐらいまで近づき、2百ミリの望遠レンズに納めました。

北海道では、浜益や函館、日高方面で発見されたという話しを聞いていますが、当地方ではこれがはじめてです。珍らしいので写真を同封します。

（鳥獣保護員）

校庭にクマゲラ

孫別小学校　大垣内四郎

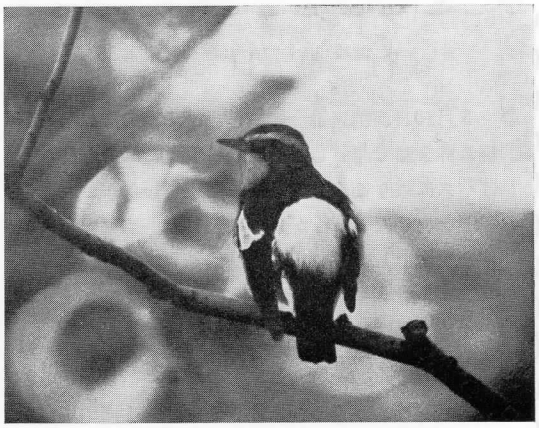
6年生の愛鳥クラブ員が、自分の食べる分にともらつたリンゴを、学校に持つてきて窓辺のカエデの木に吊しました。冬のことです。それにすぐヒヨドリがきてつつきました。私の学校は複式で、6年生3人、2年生3人ですが、みんな窓ガラスに顔をつけ、楽しそうです。

また、学校のグランドの真中に、高く立つているミズナラの木に、クマゲラが餌を求めて穴をあけました。2月の中旬頃から3月の末ごろまでに、同じ高さに3箇所もあけ、風が吹くとあぶなかしいので、子供が危険だということで、木は切り倒されたので、クマゲラがかわいそうでした。

子供たちが歩いている道から2～3米しか離れていません。朝にはその木の回りを、穴をのぞくのを子供たちが日課にしていました。たまたま早く登校した子供は、よくクマゲラに出合うことがあつて、近くまで行くと、チヨンチヨンと木のかげにかくれたそうです。

9時頃までは学校の近くで羽づくろいをしており、とつても可愛いかつたそうです。　（岩見沢市）

（キビタキ・北大植物園で＝萩千夏さん）



白いフクロウ

札幌市　佐藤　実

こんど移つたところは、月寒中央通りから南へ入つたところで、近くに森があり、朝夕にはカツコウがしきりに鳴きます。また春には、ホトトギスが二こえ三こえ鳴いたのを聞いて感動しました。北海道に来て25年、はじめてのことです。ヨシキリも鳴きます。

それから以前に、夕暮れどき、裏の雑木林でキーイ、キーイと鳴く声を聞いたので、鳥らしいと思つて窓をあけて見たら、隣りの屋根と林の間で、白つぽい少し大型の鳥が飛んでいました。二羽だつたようです。何鳥だろうと思いながら、引越しで図鑑が見えず、何処かえ聞いてみようかなと思つていました。あとで図鑑が出てきてどうやらシロフクロウらしいな、と家内と話していました。ところがそのあとで、家内が近所でこんな話しを耳

にしました。

「ことし初めてきた鳥だけど、あのなき声を、子供たち（といつても高校と大学生）が、いやがつて困る。耳があるからミミズクだろう」

ということです。シロフクロウには耳がないので、それではシマフクロウだろうかとも思いましたが、やつぱり白さが気になつていました。

それから2、3日して、家内がベランダから、「お父さん！はやくはやく」とよびたてる声。かけつけますと手で制しながら、「そつと、そつと、ほら、そこの屋根の上」と示すのです。なるほど、ベランダつづきの屋根の上に、やはり白い鳥です。丸い頭で耳はありません。カラスより少し大きいくらいで、丸々としています。

エゾフクロウとも思いますが、しろつぽすぎます。シロフクロウだつたのでしようか。　（市内西岡）

野幌森林公園を歩きませんか

私の家は野幌森林公園の近くなので、毎月第1～第2日曜に探鳥に行つています。もし一緒に鳥を見ながら散歩しようという方があれば、歓迎します。

◇　日　時　9月13日、10月4日、11月1日、12月6日
◇　集　合　各日とも、午前9時国鉄大麻駅待合室
◇　昼食、雨具などご持参ください。
◇　雨天のとき・愛護会の行事があるときは中止。
◇　用務の都合で行けないときもあるので、前の日に連絡いただければ幸いです。
◇　連絡先　札幌市北3西6　道林政課　百武　充
電話　札幌 231－4111　内線3154

行事日誌

◇　5月10日、創立総会のあと、第1回の探鳥会を野幌森林公園で開催しました。早朝6時30分、借り上げバスに乗りこんで、野幌に向いましたが、人員の制限もあって120名が参加しました。当日はあいにくの霧雨でしたが、オオルリ、クロツグミ、アカハラ、オオジシギ、センダイムシクイ、ヤマガラ、ウグイス、ヤブサメなど、31種を確認しました。そのあとアオサギの営巣地を見学しました。

◇　5月16日、市内中小企業会館で、第1回の野鳥教室を開講しました。野鳥保護の理論、野鳥の判別、野鳥の分類の3科目について、それぞれの講師から講義を受けましたが、今後はこの種企画を広めてゆきたいと考えております。

◇　6月7日、第2回探鳥会を市内藻岩山原始林で実施しました。新緑の樹間をぬいながら、早朝から登山道をたどり、アカゲラ、ツツドリ、アオバト、キビタキ、コルリ、ヒガラ、シメなど、22種の野鳥を確認することができました。

◇　7月5日、約40名ばかりの会員が、7時13分発の苫小牧行きの列車にゆられ、ウエナイ駅に着きました。ウトナイ湖畔の湿原では、ホオアカ、コヨシキリ、オオジユリン、ノビタキ、ハクセキレイ、アカエリカイツブリ、イソシギ、チユウヒなど27種を観察しました。この日はベニマシコが見れなくて残念でした。そのかわり、カイツブリがヒナを連れて湖面を泳いでおり、イソシギが足もとまで来ました。

事務局だより

暑中お見舞申しあげます。とはいうものの、もう北海道では秋の気配で、札幌市内大通公園のトウモロコシが、飛ぶような売れゆきです。

網走の大西さん、岩見沢の大垣内さん、市内佐藤さんから鳥だよりをいただきました。カラー写真を添えてありましたが、掲載できなくて残念です。今後は白黒で願います。佐藤さんのホトトギスは大変珍らしいし、シロフクロウは、利尻で6月末に発見された記録がありますが、エゾフクロウでないかとの編集部の見解です。

本会の会員を募ります

1・会員の資格は、どなたでも入会できます。
2・会費は年額1人300円。団体は1000円です。加入希望者は会費を添え、住所、氏名、職業を明記のうえ申込んで下さい。
3・加入申込みは、道庁林務部林政課内「北海道野鳥愛護会連絡事務局」に提出して下さい。

☆原稿募集☆

野鳥だりに皆さんの原稿を寄せて下さい。皆さんの身近かで発見した野鳥の記録や、感想文や愛護会に対する意見でも結構です。とくに写真を歓迎します。次回の発行は11月ですから、10月20日頃までに提出願います。